

留学生と日本学生の交流授業の開発

—異文化理解, 国際エンカウンター・グループからワールドワークへ—

Developing Cross-Cultural Class Between International and Japanese Students
—From Cross-Cultural Understanding, International Encounter Group to World Work—

中村 俊哉

Shunya NAKAMURA

(福岡教育大学教育学部)

要 旨

本稿では、留学生と日本の学生との交流授業の開発について報告、検討する。まずカルチャーショック予防、異文化理解のために試みられているCultural Assimilator, 国際エンカウンター・グループの試み、さらにワールドワークの試みについて紹介する。そして本学で試みた交流授業の流れを異文化理解教育と国際エンカウターの流れで報告するとともに、紛争を解決するワールドワークの視点をいかに取り入れられるかを検討したい。最も重要な点は、現在周りで起こっている問題を隠してしまわず、取り上げること、感情や身体を感じ取り扱うことである。

キーワード：異文化交流 異文化接触 国際エンカウンター ワールドワーク

はじめに

本稿では、福岡教育大学における留学生と日本の学生との交流授業の開発について報告、検討する。最初に、世界各地で行われているカルチャーショック理解の試みについて紹介する。次に、国際エンカウンター・グループの試みについて紹介し、最後に、ワールドワークの試みについて紹介し、本学で試みた交流授業の流れを異文化理解、国際エンカウターの文脈で紹介するとともに、ワールドワークの視点からも検討したい。

文化接触理解

文化接触による衝撃やゆううつ感についての研究は、オバーク (1960) のカルチャーショック、リスガード (1955)、ガラホーン (1963) のUカーブ曲線理論の提唱から始まったと言えよう。違う文化を体験する当初は、わくわくし、生き生きしているが、次第に異文化体験により適応が下がり、ゆううつとなり、またホストカルチャーとの接触が減り、言語学習の意欲も減る。しかし、さらに時間が経過すると、言葉が理解できるようになり、その文化を理解できるようになると、適応が上がり、また生き生きしてくる。このUカーブ理論は、カーブが下がったときにでも希望がもてる理論であるため、臨床的な

理論と言える。

さて、このような文化接触の研究は、当初はアメリカでの研究が中心であったが、80年代以降日本での研究も増え、星野命 (1980)、渡辺文夫 (1995) 等の研究が見られるようになった。

ここで文化接触の前の教育、予防教育についてふれたい。Cushner & Brislin (1986) は早くから異文化状況を設定した設問集をCultural Assimilatorとして出してきたが、これらが草創期の異文化ショックの予防教育の形である。これらは、文化接触の途中であっても使えるものである。日本では、当初一部しか紹介されていなかったが、大橋、近藤、秦、堀江、横田 (1992) により、『外国人留学生とのコミュニケーションハンドブック—トラブルから学ぶ異文化理解—』が出版された。これは、日本で体験された留学生と日本人との葛藤場面を集めたものである。これは日本人向けの本でありながら、葛藤場面は留学生向けにも使うことが出来た。つまり、あらかじめおこりそうなトラブル場面を紹介し、その心理的背景を推測させ、ディスカッションするというのが、一つの型となったのである。これらの教材は、日常のトラブルから作成できたので、比較的多様な試みがなされたと思われる。一方、上記のハンドブックに見られる葛藤事例は、いくつかの問題

に突き当たった。それは、回答が必ずしも固定的でなく、ある国の行動パターンとして紹介されていても、必ずしもその国でその通りに行われているわけでもないことがたびたびあった。文化は流動的であるとともに、文化内の地域、階層、属性によっても異なっていた。もともとBrislinらのテキストをみても、日本人の考え方、パターンとして紹介されているものは、日本人から見ると一面的な印象を持たざるを得ない。よって、この種の葛藤を扱うときは、テキストを批判的に用い、ディスカッションを中心にすることが必要となっている。むしろテキスト化が、ステレオタイプを生み出す逆効果があるのである。しかし、基本的に、トラブル、葛藤をあらかじめ紹介し、それについてディスカッションすることは、異文化間教育の中でも最も基本として位置づけられよう。なお、長期的な滞在、子どもの居る人の文化体験を含めたものとしては、箕浦康子(2003)の『子どもの異文化体験』を欠くことが出来ない。将来の葛藤を予防するために、あるいは理解を促進するために、留学生用の授業、あるいは異文化交流を志す日本の学生への授業に、積極的に用いることが重要であろう。また、多国籍企業、日系企業などにおける文化接触をあらかじめ知っていることは重要である。これは、権力の格差、不確定性、集団主義などの次元で企業文化を扱ったアドラー(1991)の『異文化組織のマネジメント』が参考になり、紹介することだけでも意味があろう。

さて、これらを予防教育と位置づけることが可能だが、必ずしもカルチャーショックは悪くないということが、繰り返し強調されるべきであろう。つまり、カルチャーショックは予防する必要はないということである。カルチャーショックを体験するのは、その新しい文化に入り込んでいる証拠である。ホスト文化から分離しているのでは、いやな体験も、苦しい体験もしないであろう。しかし、これが文化の差異からくる苦しみであることを理解しておくことは、その先の深刻な落ち込みを防ぎ、更にカーブの上昇に寄与するであろう。したがって、異文化接触の特質を理解すること、現在進行形の苦しみを文化接触の視点から理解することが、最も重要である。これらは、留学生用の授業にも大いに用いることが出来る。

国際エンカウンターグループ

いろいろな民族、人種、国籍からなるベーシック・エンカウンター・グループの萌芽としては、C.R.ロジャースが1967年の夏にカリフォルニア大学サンディエゴ校にておこなわれたワークショップにさかのぼるとされる(清水1999)。これが、ラホイア・プログラムとして世界的に知られるようになった。ロジャースは晩年、宗教対立、人種的対立、国際紛争

解決などにベーシック・エンカウンター・グループを活用しようと尽力した。村山(1993) 巖(1999)によると、彼は、アングロス(イギリス系アメリカ人)とチカーノス(メキシコ系アメリカ人)の緊張と葛藤を緩和した。コミュニティの各層のリーダーを集め、週に1度、12週間のグループを実施した。彼らは共通課題に気づき、互いに尊敬の念を覚えるようになり、共同で行動するようになった。また、北アイルランドのプロテスタントとカトリックの人々のグループを週に1回、12週間行った。ここでは、相手の残酷さに対する恐怖、非難が語られた。あまりに激しかったため、お互いの変化は困難とされていた中、相手への印象の交換を行ったことをきっかけに、共感が深まったという。

その後も、パーソン・センタード・アプローチの集まりの中で、国際エンカウンターが組まれてきた。

日本では、1996年から始まった人間関係研究会の国際エンカウンター・グループ(IEG)、2001年のPCAフォーラムなどが見られる。清水の報告によると、この国際エンカウンター・グループは日本語を主体として英語を交えて行われたが、参加者が20名前後、スタッフが8名前後で、比較的大きな集団であり、グループが分かれても対応できる体制でやっていたという。

第1セッションは、参加の動機や、国籍を含む自己紹介が多い。第2、3セッションは、外国籍の人が積極的に自己を表現する。日本に住むようになった経緯、在日2世、3世としての生き方などである。第4セッションでは、個人的な思い、ネガティブなつらい体験なども表明される。英語で話したい、もっとゆっくり話してほしい、年下が年上にかみついたのはショック、などがあった。最終セッションは、気づきや前向きな姿勢があらわされた。

清水、高松ら(2004)は、人間性心理学会のシンポジウムで国際エンカウンターについて取り上げた。「多文化相互理解エンカウンター・グループ」と名称を変えて、通算8回のワークショップが開かれているとする。

なお、構成的エンカウンター・グループについても、ここでふれておく必要がある。ベーシックなエンカウンター・グループと異なり、リーダーが用意したプログラム(エクササイズ)で作業や討議する方法のことである。野島(1992)によると、日本では1970年代から各地で行われている。ここでは、レディネスのない人にも可能である、専門的リーダーでなくとも展開できる、短時間にリレーションを高められる、グループサイズを大きくしうる、安全性が高いなどの特徴がある。そして、構成法と非構成法は、補完的であり、組み合わせることが可能だとする。これらを異文化間交流授業で用いることが可能であろう。

ワールドワーク

一方で、ミンデルはワールドワークという新しいグループを行った。ワールドワークの特徴としては、今ここでの紛争や怒りを取り扱うことである。ワールドワークには、専門的な手法が必要であるが、グループの力に信頼し、新しい気づきを体験するためには、最も有力なグループと言えよう。これらは、紛争が周りで多発しながらも、それらを言葉で取り上げにくい時に有効であろう。そして、この数年、日本においては、留学生を取り巻く状況は厳しく、最も多数を占める中国の学生は、日本での殺人事件や、中国での襲撃事件、サッカーサポーターの事件、領海侵犯事件、靖国問題などが頻発していながら、異文化交流でそれらのテーマを避けたままにしておくことはふさわしくないと判断した。また、しばしばこれらのテーマは、攻撃的な言動を誘う可能性がある、それを防衛するために取り扱わない傾向があると思われた。そこで、ミンデルのワールドワークについての文献を読み合わせることで意味があると考えられるようになった。また、紛争の内容を資料として提示してディスカッションするという、一種の構成的国際エンカウンターを試みる中で、ワールドワークの手法も参考にできると考えた。

異文化交流の心理学、異文化間心理学

留学生だけを集めた日本語以外の授業としては、本学でも比較教育文化論、日本事情などがあり、筆者もこの9年間、前者に関わってきた。異文化間教育学会のアンケートによると、日本人学生と留学生が混合した授業についても、全国的に見られるようになってきた。筆者は、この種の日本人学生と留学生が混合する授業を立ち上げ、ディスカッション形式として工夫を重ねたので、それについて報告する。まず、春学期（前期）の「異文化交流の心理学」は、留学生に限定しない授業として立ち上げたところ（1999）、日本の学生が150名以上集まる授業となったものの、当初は裏に他の留学生用授業があったことで、留学生自体が少なかった。これらを解決した後（2002）に、留学生は制限なしに入ってもらうようにし、毎回20人程度の参加を得るようになった。日本の学生には選抜を取り入れて50人程度に限定した。レクチャーの他に7-8グループに分かれてのディスカッションを行い、最後にそれをシェアした。教員は各グループを渡り歩いた。ディスカッション、教員からのレクチャー、留学生からのレクチャーの3段構成とした。本授業は春学期開講であり、教養教育の単位の認定を受け、また同時に、留学生用の授業リストに入れた。ただし、必要な日本語レベルを上級としている。

次に、秋学期（後期）に「異文化間心理学」という授業を立ち上げた（2000）。これは、共生社会教育

課程の課程共通単位として認定されている。このため、2年生以上のみの参加となった。また当初は、留学生が少なかったが、同じく留学生用授業のリストに入れ、日本語のレベルは上級とした。裏の授業がなく、留学生が集まりやすい金曜の1限に時間変更すること（2002）で、留学生が5-10人、日本学生が10-20人の、一つのグループとしてのディスカッションが可能な授業とすることが出来た。教員より、異文化間心理学の最近の知見についてレクチャーを行い、2段構成とした。

以下に、2003年の春学期から2004年の秋学期までのこれら二つの授業の4期にわたる流れを順に紹介し、異文化交流授業の可能性、留意点、ディスカッションの内容についての検討を行う。

異文化交流の心理学 2003年春学期（03年前期）

授業オリエンテーション時は、150人ほど来ており、階段の下まで立ち見が出てわきかえっていた。机が移動できる教室206のキャパシティから、人数を絞らざるをえなかったため、アンケートを採り、その中のある回答により、日本の学生に限って50人程度に選抜した。英語でディスカッションするグループを一つ作り、のこり6つ（のちに7つ）のグループは日本語とした。留学生の内訳は、中国が12人（うち、学部生は7人）、韓国が2人、オーストラリア2人、アメリカ2人、メキシコ1人、コスタリカ1人、ルーマニア1人、インドネシア1人であった。日本の学生は48人であった。

03年前期 2 最初各グループで、自己紹介の後、「留学生にどこから、何時来日し、何を勉強しているか聞く、留学生の形態を知る」というエクササイズを20分行う。それぞれ活発に会話が進んでいた。各グループで、記録を提出し、書記に感想を書かせた。この回の書記の感想の中には、留学生の日本語が上手でびっくりしたというものが多かった。次に世界の名前の構造をレクチャーする。最後に、「ここが変だよ日本人」のビデオ（メッカ）を見せる。これは、あるテーマをめぐる、外国人と日本人が闊達に討論する番組である。

03年前期 3 ディスカッションは「好きな食べ物、朝は何を食べるか」、「何時に寝て何時に起きるか」。感想としては、「好きな食べ物の話題で持ちきりで、内容が濃かった」、「天ぷらが好評で納豆が不評だった」、「犬を食べるという話を聞いて違いを感じたけど、とてもおもしろかった」など。講義は、しぐさ、挨拶の文化による違い。さらに、割り勘についての質問紙を行った。「ここが変だよ日本人」のビデオ（愛の表現、たたみ）を見せる。「国際結婚のビデオを見て、異なる文化を持つ人同士が理解し合うのはとても難しいことと思った。異文化交流は一見簡単そうに見えるが、心の底からお互いが異なっ

た文化を理解するということは非常に難しいことなんだなということを改めて思った」との感想あり。

03年前期 4 割り勘の質問紙の分析を紹介。ディスカッションは、「先生、友人、先輩と食べたとき支払いはどうしているか」。感想によると、「呼び方、支払い方法ひとつにしても文化の違い、考えの違いが見えておもしろいです」、「欧米では上下関係は全くないようなので、とてもうらやましい」など。

03年前期 5 班を替える。班が替わって、日本語のレベルが変わり、驚いた人も多い。ディスカッションは「親からどのような食事のしつけを受けたか（おはし、おわん、ナイフ、直箸など）」、「父親はやさしいかきびしいか」で行った。感想によると、「日本の父親はきびしく、反抗期には嫌われるのに対して、外国では父親はやさしい」、逆に「外国ではマナーに厳しい親が多い」、「ルーマニアやフランスでも一人っ子の割合が40%もあることに驚いた」など。途中から恋愛の話で盛り上がった班もあった（中国では高校まで恋愛禁止など）。これに対して、メキシコでは中学でもいいとの反応あり。レクチャーは、エスニック・アイデンティティについて。留学生のレクチャーとして、内モンゴルの学生から、中国に56の民族があること、モンゴル語で大学まであること、魚は食べないなど紹介。

03年前期 6 「しぐさの差について」。I love you, お金、デート、一番いいという意味のしぐさなどがシェアされる。レクチャーとして、引き続きしぐさ、マナーの違いについて。次に、「マレーシアの日系企業でマレー人用と華人用の食事を同じところで作ったところストライキがおこった。何故か」、「文化によって食べてはいけない食べ物」で行った。感想ではジェスチャーの違いに驚いた人が多かった。

03年前期 7 風呂について、同室就寝についての質問に記入させる。ディスカッションは「父は育児をどれくらいしたか」、「父はいつまで風呂に入れたか」、「いつまで親と同室で寝たか」。以前の質問紙調査から、分布をレクチャーにて紹介。オーストラリアの学生のレクチャー。写真などを交えて。

03年前期 8 Cushner&Brislin (1986) から37番の「贈り物の交換（恵子の心理について）」の英文と和訳を示し、「贈り物にはすぐお返しするか」をディスカッション。プレゼントについての話が盛り上がった。近所へのお返しは、中国では間をあける。ルーマニアの学生のレクチャー。

03年前期 9 「夢をどう理解するか」。夢についてのことわざや、初夢のことなどを紹介し合うことが多かった。悪い夢を見ると、現実にはよいことがある（中国）など。韓国の学生のレクチャー。

03年前期 10 ある弁当のエピソードを読んで、何が文化的な違いかを討論。「弁当の中身は何か」、「ジュースについては決まりがあるか」、「先生の

取った行動についてどう思うか」。筆者がグループを回っていると、ご飯を遠足に持って行くのは、中国では変、貧しいんだと思う、などの発言あり。中国では温かいご飯でないと食べない習慣がある。何で日本ではジュースがだめなのか、答えが出ないようであった。レクチャーは、甘えについて。アメリカの学生（二人）のレクチャー。

03年前期 11 グループ別の活動。料理を持ち寄ったり、ゲームをした。

03年前期 12 班の入れ替えを行い、名前覚えゲームのエクササイズを行う。「自分の将来やりたいこと」。文化変容についてのレクチャー。

03年前期 13 レクチャーとして、試験の予想問題を示すとともに復習を兼ねる。「じゃんけんの仕方に文化の違いがあるか」、「自分の良いところ」。インドネシアの学生のレクチャー。

03年前期 14 メキシコの学生のレクチャー。その後、試験とアンケートを行った。

異文化間心理学 2003年秋学期（03年後期）

この年から、後期の授業は留学生の参加しやすい金曜の1限に変更した。2年生以上。朝への変更の影響で、日本人は少なかった。共演2という教室で、机をゼミ形式に並べて行った。日本人学生が10人ほど、単位を取る学部留学生が2名、短期留学生や研究留学生が8人～10人が参加した。うち、中国人が6人、韓国が1人、モンゴルが1人、カナダが1人、オーストラリアが1人、タイが1人、インドネシアが1人である。

03年後期 1 ゼミ形式に机を並べ、順番に自己紹介と趣味を言ってもらう。引き続き、世界の名前の構造についてレクチャーを行う。モンゴルの留学生が、父の名前を前に付けることと、名前の意味を紹介した。

03年後期 2 名前を言いながら近況を言ってもらう形式とし、出欠に代えた。引き続き名前、ファーストネームだけの文化、姓でなく父の名前を付ける文化などを紹介。アメリカ滞在経験者（帰国子女）が一人いた。ディスカッションは、「出身地について（知って欲しいこと）」。

03年後期 3 近況として、留学生からは、兄が国から来た、自転車を昨日盗まれた、テレビに出たなどが話された。またニュースとしては、殺人事件、風俗などが多かった。レクチャーはUカーブ理論についてで、英語圏の人には、英文解説を配りつつ説明した。この後、自分の来日（日本人は、入学）からの適応曲線を各自書いてもらう。何人かにカーブを解説してもらう。第一希望に落ちた、言葉が出来ず帰りたい気持ち、バイトきびしかった、交通事故などが低下の理由として語られた。

03年後期 4 「近況」と「引っ越しをしたとき近

所の人とどう接するか」とを順番に述べる。日本人は、自分から挨拶しに行く。韓国の人々は、隣が年上に見えたら進んでゆくとした。タイでは、周りが来るとした。ベリーの「文化変容」についてレクチャー。

03年後期 5 「近況」を語り合った後、西安の事件がちょうど起こったので、ビデオを見て、その原因についてディスカッション。カナダ人が、日本と中国からの情報がいつも正反対であると発言。中国人より、買春事件と西安の事件に関連があると発言があった。女子の人形を持ってステージに上がったとか、日本人教師が「彼女は私の恋人」と言ったとか、ネットでやりとりされていることが分った。モンゴル人より、日本のピアガーデンでズボン脱いだ人がいると発言。

03年後期 6 「一人一言」の後、ディスカッション「あなたの好きな食べ物と食べられないもの」。蚕がおいしいとかだめだという話、日本のパンは甘い、明太子が中国にない、納豆を食べるようになった、生ものを食べない、朝ご飯を作らない等。レクチャーは、箕浦の「子どもの異文化体験」。

03年後期 7 「一人一言」は、学祭の話が多かった。箕浦康子の『子どもの異文化体験』からいくつかの例を発表してもらう。オーストラリアでは、教師は外であったことには責任はない、との発言。

03年後期 8 箕浦の『子どもの異文化体験』から留学生にも発表分担をしてもらう。花子の例から、日本の対人関係についてディスカッションが進む。女子の中で、噂することが多いこと、はみ出ると孤立することなどが語られた。

03年後期 9 ひとりひとこと、「お彼岸と盆暮れには何をするか」。日本の学生から、お盆の様子、留学生からは清明節、ドルジーン（タイ）、ハンシネール（モンゴル）、イースターなどが交わされた。死生観の比較（中村、未発表）を紹介したのち、「親子関係の比較」（中里 1995）をもとに、それぞれの親子関係について（父への尊敬、一人暮らしの多さ）ディスカッション。中国人が父親によく相談するのが印象的であった。

03年後期 10 ディスカッションは「割り勘をどうするか」。中村が2002年に行った調査の比較、「あげもらい」（横溝 2001）のレクチャーをする。中国での順番に一人が払うやり方のほか、各国の事情が話される。中国の学生より、家族に礼を言っていない、間をおいている感じがするとの発言。

03年後期 11 年末から正月の体験、一年の抱負。「携帯電話と対人関係について」。甘えについてのレクチャー。「靖国神社を訪問」するビデオを見る。

03年後期 12 近況、ディスカッション1「ハンカチをプレゼントしたら変な顔をされた、何故か」。タイでは、ハンカチをもらった1バース上げ、泣か

ないようにすると。韓国では、日本と同じく別れの意味はなくプレゼントする。ディスカッション2「日本人は親切なのか、冷たいのか」。電車で席を譲らない、知らん顔された、留学生に興味がないみたい、等。ロス暴動のビデオを見せ、紛争解決の方法、伝言ゲーム、デマなどをレクチャー。「世界の子育て」のビデオを見る。

異文化交流の心理学（04年前期）

オリエンテーションでは、アンケートを書いてもらい、日本の学生を選抜した。英語のグループを1つ作り、他の8グループは日本語とした。留学生は、中国が15名（うち、学部生は9人）、韓国1人、カナダ1人、オーストラリア1人、タイ1人、モンゴル1人、ギニア1人であった。日本の学生はある基準で選考し、54人であった。

04年前期 2 名前の呼び方、名前の構造についてレクチャー。ディスカッションは「何時に起きて何時に寝るか」。

04年前期 3 レクチャーで、名前の構造つづき。挨拶としぐさの比較（こっち来てとあっち行け等を紹介）。ディスカッション「小学校、中学、高校、大学に昼寝（シエスタ）はあるか」（大きく変化したのはいつか、昼休みは短い）。感想では「昼休みの長さや取り方から、日本、中国それぞれの考え方の違いを考えることが出来て良かった。おもしろいことが分ったと思う」等。オーストラリアは昼休みがない（大学）。

04年前期 4 「ここが変だよ日本人」のビデオ（愛の表現、たたみ）を見せ、文化のずれが、怒りに転じる仕組みについて講義。ストックホルム症候群についてレクチャー。ディスカッション「外食するとき、あなたの国の文化では誰がお金を払うか」（5択）。順番制、誘った方が払うなどが紹介される。感想は「中国も韓国も誕生日に自分が誘ってお金を出すというのが驚いた」など。グループ活動の計画。

04年前期 5 カルチャーショック、Uカーブについて講義。オーストラリアの学生のレクチャー。大戦のこと、カウラでの逃走事件と日本庭園。ディスカッション「食べることについての文化、習慣の違いはあるか」（鯨、鳩、犬、馬を食べるか、食べる人をどう思うか）。それぞれの文化で食べていけないもの（鯨、鳩）がシェアされた。

04年前期 6 ワールドワーク、エンカウンター・グループについて講義。中国の学生のレクチャー：中国の少数民族について。ディスカッション「小学校、中学校時代に一番楽しかった思い出」。修学旅行や部活、体育祭、文化祭の話で盛り上がった。次に「これから1年間に自分がやりたいと思っていること」でも海外旅行、語学向上が多かった。

04年前期 7 グループ別の活動。質問しあった

り、ゲーム、折り紙をしたり、食事を持ち寄ったりして、それぞれ充実していたようである。

04年前期 8 レクチャーでは、スケープゴートプロセスについて(アガザリアン)。弁当のエピソードを読んで、何が文化的な違いかを討論。「遠足は、外国ではどのようなか、何というか、弁当の中身は何か、ジュースについては決まりがあるか、先生の取った行動についてどう思うか」。驚いたという感想が多い。「おにぎりが中国人から見ると汚いイメージであるのはどうしてでしょうか」という感想あり。小テスト。

04年前期 9 班替えをし、名前覚えゲーム。レクチャーは、留学生に関する常識問題4問。「親からどのような食事のしつけを受けたか、お風呂のマナーについてどのようなしつけを受けたか」。シェアでは、取り皿を使うか、直接取るかなどで違いが紹介された。感想に「日本では普通だと思っていることが、他の国の人から見れば変に感じられるということを、今日のディスカッションで改めて実感できた」など。

04年前期 10 箕浦康子の『子どもの異文化体験』を講義。韓国の学生のレクチャー：サムルノリについてビデオを見ながら韓国の歴史等の説明。ディスカッションは「質問タイム」とし、質問された人は答えてもいいし「今は答えたくない」と言って良い旨を説明。お盆、弓道、中国ドラマ、中国人けど朝鮮民族、相撲がある、いくつまでお風呂に一緒にはいる、男が料理するか等の質問がそれぞれの班で交わされた。

04年前期 11 友人との距離、プライバシーの考え方について講義。Cushner&Brislin (1986) から28番の英文と和訳、4択問題を紹介。留学生の講義は、カナダの学生。カナダの地理やフランス語系の州について。ディスカッションは、「友人との距離(友人に何でもいったり聞いたりするか、友人間のプライバシーの考えはあるかないか、あげもらいの違い：お金を貸すか、泊まらせるか)」シェアでは、中国の方が何でも話すし、暗証番号まで知っている、という話で盛り上がる。一方で集団で行動しないという。

04年前期 12 ベリーの文化変容理論と、エスニシティの理論を講義。タイの学生のレクチャー。挨拶の仕方、しぐさなど。ディスカッションは、「自分の良いところ」。最後に、留学生常識問題10問を講義。

04年前期 13 留学生常識問題4問を講義。文化と死生観について講義。モンゴルの学生のレクチャー。統一、革命とナードム、文字などの紹介。ディスカッションは、「あの世か、天国と地獄か、輪廻か」、「お盆とは、中元、鬼節とは」。各国のお盆(タイのワンサータイなど)。ギニアでも輪廻観あり。お盆は中国では今はない等。

04年前期 14 ギニアの学生の講義。ODAとJICAについて。この後、テスト実施。

異文化間心理学 (04年後期)

前年度と同じく金曜の1限の授業で、2年生以上の制限があった。206教室で、机をゼミ形式の四角に並べて実施。

04年後期 初回 授業の説明、自己紹介。そのとき、海外体験も言ってもらったところ、中国に短期留学した人が5人ほどいた。のこり時間は、ビデオ(ここが変だよ日本人99年)を見せた。日本の学生25人、留学生は、中国人が6人(うち学部生3人)、ベトナム人が1人参加であった。日本人3人と中国人3人が03前期の授業への参加者であった。

04年後期 2 文化と名前の構造についてのレクチャーを行う。また、しぐさの違い、同じ音を言語で言い表すときの違いなど。電話のトーン音がプーとトゥーで違ったことに、留学生自身驚いていた。

04年後期 3 ガラホーンらのUカーブ理論をレクチャー。ディスカッション「自分たちの体験」を海外体験者と留学生に聞いた。北京2人、大連3人の短期留学経験者からは、食事、トイレに反応してカーブが下がったことが述べられた。これに対し、留学生はトイレについては防衛的に反応した。トイレの話をやめようと言った男子留学生は、刺身を食べられるようになった話をした。バイトをし、日本人に助けられて確かにUカーブになっているとした。

04年後期 4 ベリーの文化変容を説明のあと、「引越し、プレゼントの包装紙の破り方、ハンカチを顔にあてるか、鼻かみ」などの例を引きながら、その場で挙手させて同化、統合などと分類した。そして、風呂のテーマになったので、「風呂の入り方について思うところ」をテーマとした。ベトナムからの留学生が同じお湯で、お父さんから入るやり方に疑問を呈する。日本人からは、うちはお父さんが最後という発言あり。湯を替える話から、子育ての父親の役割として風呂に入れることがあること、中国、朝鮮では父親は娘を風呂に入れないことなど。

04年後期 5 箕浦康子の『子どもの異文化体験』から、太郎、三郎の2人を発表形式で紹介。帰国して日本で適応できなかった例を討論しつつ、日本の体育会系の「上下関係」について紹介があると、留学生から後輩は何故従うのかとの疑問があった。自分なら断るという発言に場はわいた。ディスカッションは、「日本では何故電車の中で携帯電話がだめか」というテーマで行った。日本人から3通りほど考えが出た一方、中国人留学生から、中国では皆大きい声で話しているので、携帯は気にならない等の発言があった。

04年後期 6 近況報告で、コンサートのチケットの話題が多かったので、留学生向けに詳しく紹介し

てもらった。箕浦康子の『子どもの異文化体験』から、春子、良一、菊子の3人を発表形式で紹介。時間切れでディスカッションはなかった。

04年後期 7 「あげもらい」 についての日中の比較研究(横溝 1999)を紹介しつつ、その中の3つの場面を取り上げて、その場で挙手させ、日本の学生と留学生で比較した。遅刻を待つ設定では、日本人の方が、連絡のない同級生あるいは初対面の人の遅刻に対して、長時間待った。「ごちそう、順番の優先などについて思うこと」を自由にディスカッションとし25分ほど行われた。ベトナム、中国の学生からは、「次回にごちそうしてもらえばいい」という考え、「おごとと明言した後、高いものを飲み食いされた困った」経験。また、「日本人におごってもらったつもりはないが、1回おごってもらった」、「お金に細かいのを見てると、本当に仲が良いのか、なら一緒に食事しなければいいのと思う」という中国人からの発言があり、場が盛り上がった。最後に、中国留学経験者から、「向こうでおごるつもりで招待したのに、逆にごちそうされ、良かったのか」という発言。

04年後期 8 ミンデルの『紛争の心理学』のプリントを4人が発表。ワールドワークのさわりを勉強した。近況報告では、バイトの話が多かったが、留学生から不法滞在のニュースを見た話が出た。レクチャーは、子育ての文化による違い(授乳、断乳、離乳と、おむつはずしの文化)と葛藤について。ディスカッションは「質問タイム」。日本の学生から、中国やベトナムでも公園デビューがあるかとの質問。日本人からは夫婦の力関係の質問。ベトナムでは母が強いと。中国も似たようなものという意見、掃除も家事も男がするとの意見。留学生から、「兄弟(姉と)で割り関している人がいたが、よくそんなことする。仲が悪いのか聞くと、良いという。割り勘などして仲がよいのは考えられない」との発言で、二人の日本人から返事がある。

04年後期 9 ミンデルの『紛争の心理学』続き。靖国問題の記事を配布し、その対立ポイントを示し、ビデオ(NHK)を15分間見せる。「質問タイム」のあと、ディスカッション「靖国問題をめぐり、身体で感じることは」。沈黙ののち、日本人より「ビデオを見て苦々しい気持ち、すぐに飲み込めない感じ。なぜ分祀できないかと」。中国人男性学生から、「三国志の最初には昔話なので笑いながら話すところがあるが、靖国問題は未だ笑いながら話せない」こと。A級戦犯を分けなければいいかという質問には「そうだ」という答えがあった。日本人より「首相の行動が日本人の行動と思われ、残念」という発言。

04年後期 10 近況の他に、聞きたいこと、ディスカッションしたいことを一言ずつ言ってもらう。近況で、成人式の予約について述べた女子学生が2名

いた。聞きたいことでは、日本の学生から「クリスマスをとどのようにやるか」、「戦後補償についての今の世代の意見」、「就職活動」、「天皇制について他の国ではどのように思うか」、「成人式はあるか」など、留学生からは「クリスマスと正月のどちらが人気か」、「日本ではメディアからのニュースを何%信じるか」、「天皇をどれくらい尊敬するか」などが出た。レクチャーでは、アドラーの『異文化組織のマネジメント2章』を3人が発表。集団主義、権力の格差、不確実性などの国際比較をする。日系企業は、現場の課長で決められず、本国にお伺いを立てることを紹介。ディスカッションでは、まず「クリスマスと正月」について。若い人だけで、プレゼントを親からもらったことはないとベトナム、中国の学生。その後、「マスコミを信じるか」について。日本人が100%と答える。中国で100%信じていたが、日本に来て気づくことがあったとの発言あり。靖国問題と寸劇事件の資料をレポートの課題とする。

以下、ディスカッションは。11回、12回、13回は、継続中であるがワールドワークを参考に、なるべく抑制させずにディスカッションを続けている。レクチャーは、寸劇事件の報道、子育ての文化比較など。3つの小グループに分けてのディスカッションも取り入れた。

考 察

異文化交流の授業は、同じ大学に在学しているにもかかわらず、普段あまり接点がなかった留学生と日本の学生が、初めてこの授業で対面し、交流するという点で、場としてみても重要な意味を持っている。近況報告を出席に代えて行う(後期)ことによって、お互いが知り合え、好みなども分かるようになっていった。また、安心感が醸成された。そして、互いの文化の違いについて、少しずつ意識化してゆくプロセスが見られた。違いがあること自体を知らなかった日本人が多い。また違いが文化の心理的影響を与えうることにについても理解が進んだと思われる。

それぞれの文化の違いを意識し、理解しておくことは、留学生のUカーブの底辺を軽くする意味もある。そもそも、Uカーブという現象が存在することを伝えることは、異文化接触をしつつある留学生にとってはきわめて重要であろう。また、それを自らグラフにしてもらうことで、留学生の現在の状況を知ることでもできる。Uカーブは、教科書通りにきれいに出来るわけではないが、確実に存在するし、異文化理解をすることで適応曲線が上昇することも確実にあると私は感じている。

さて、これらの授業の中で行ったディスカッションは、国際エンカウンター・グループの中でも、構造的な形をとった試みであった。資料を基に話し

合ったり、テーマを決めて話し合うというスタイルが多くなったのは、参加学生のレディネスの問題、人数の多さの問題などを考慮した結果である。しかし、筆者は、潜在した葛藤を避けたままにさせないことが重要と考えた。潜在しやすいテーマは、「日本人が冷たいのではないか」、「日本人の友人関係」といったものであることは、それまでの経験から理解していたので、これらを話しやすくするためにいくつかの資料を用いた。もちろん、これらの苦痛な体験は、文化の違いから来るものもある。つまり、友人関係が多少異なるために来る衝撃というのは、最も隠された衝撃である。友人関係についての文化の違いというのを検討する機会も重要となる。次に潜在しやすいのは、現在進行している日中紛争のテーマであった。これは、大グループで取り扱くと、攻撃性が噴出することもあり得るテーマであり、慎重になることが多いテーマである。これらを扱う前には読み合わせなどの心の準備が必要と考えた。さらに、対立を包み込むだけの教員の対応が必要であり、そのためには、国際エンカウンター、ワールドワークなどの見通しのある枠組みが必要であろう。つまり、これらの枠組みを参考に、乗り越えるイメージを持ちながら進めることが重要である。ミンデルの『紛争の心理学』では、混乱や衝突こそ、最も重要な教師であり、コミュニティ感覚を作る契機と捉える。衝突を、創造のために活用するのである。

異文化交流の授業は、その規模によって多少やり方が異なる。前期の授業は、大人数であったために、紛争について深いところまでは扱えない。同じ後期の少人数授業でも、03年は日本人と留学生の割合が半々であったことで、自然と話が展開しやすかった。

印象としては、全体の人数が25名以上になるか、留学生の3倍以上日本人が居ると、自然な対話に時間がかかる。最も展開しやすいのは、日本人10人、留学生10人ほどである。これ以上の場合は、小グループをとり入れることが望ましい。

こうして、後期の20人程度の授業では、紛争について活発な意見が出された。第3国のカナダ人の発言などは、創造的な触媒となったと思われる。また、怒りなどは、直接的に出ず、内省的な発言が多かったのは、ある意味ではプラスに評価できる。怒りの部分は、資料やビデオですでに承知の上のディスカッションだったということもあろう。あるいは、多様な視点の資料を提供（新聞の切り抜き、雑誌記事など）していることで、客観的な雰囲気を保証したといえよう。いずれにせよ、怒りを扱うことは、お互いにとって重要なテーマである。今後とも、異文化交流の授業の中で、隠されたテーマを取り上げて行くことが、互いの成長と、解決のために重要である。しかも、ワールドワークの背景となっている、身体を感じを語ることで、世界で起きていることが

ここでも起こっているという理解などが重要な枠組みを提供すると思われる。

文 献

- Adler N. J. 1991 アドラー 異文化組織のマネジメント 江夏健一、桑名義晴監訳 マグロウヒル
- Cushner & Brislin 1986 Intercultural Interactions, A Practical Guide, Sage Publication
- Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. 1963 An extension of the U-curve hypothesis. Journal of Social Issues, 19 (3), 33-47
- 星野命 1980 カルチャーショック 現代のエスプリ 161 至文堂
- 裳岩英章 1999 平和とグループ・アプローチ 現代のエスプリ 385 至文堂 196~204
- Lysgaard, S. 1955 Adjustment in a foreign foreign society : Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. International Social Science Bulletin, 7, 45-71
- ミンデル 2001 紛争の心理学 融合の炎のワーク 永沢哲、青木聡訳 講談社現代新書
- 村山正治 1993 エンカウンター・グループとコミュニティ ナカニシヤ出版
- 野島一彦 1992 文献研究の立場から見た構成的グループ・エンカウンター 国分編 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- Oberg, K. 1960 Culture shock: Adjustment to new cultural environment. Preactical Anthropology. July-Augst, 177-182
- 大橋敏子、近藤祐一、秦喜美恵、堀江学、横田雅弘 1992 外国人留学生とのコミュニケーションハンドブックトラブルから学ぶ異文化理解—アルク
- 清水幹夫 1999 国際ベーシック・エンカウンター・グループ (グループ・アプローチ) — 現代のエスプリ 385 至文堂 165~177
- 清水幹夫、榊裕子、下田節夫、高松里、畠瀬稔、福岡直樹、諸富祥彦 2004 「多文化相互理解エンカウンターグループに関わって」人間性心理学会自主シンポジウム
- 渡辺文夫 1995 異文化接触の心理学 川島書店
- 横溝環 2001 中国人学生と日本人学生の「あげもらい」及びそれらに伴う「精神的負担」「お礼(謝罪)」に関する一事例研究 異文化間教育学会第22回大会発表抄録 38-39